長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

NAGASAKAKAMIJYOU-SITE

長坂上条遺跡

住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1997

山梨県長坂町教育委員会

序

長坂町は広大な八ヶ岳南麓のほぼ中央に位置し、自然に恵まれた高原の町であるとともに、およそ200ケ所に上る遺跡の密集地帯としても知られています。

長坂町教育委員会では民間・公共各種の開発事業に際し、このように数多い遺跡の保護をはかりつつ、必要に応じて発掘調査を行ない記録として遺跡の内容を後世に伝えるための事業を推進しております。

本書は平成８年度に個人住宅の建設に先立ち、建設によって遺跡の破壊される部分を発掘調査した記録の概要を報告するものです。長坂上条遺跡では縄文時代後晩期と平安時代の遺構・遺物がそれぞれ確認されました。本遺跡は昭和15年に部分的に学術発掘された著名な遺跡として知られていますが、半世紀を経過した今日再び調査の機会を得たことにより遺跡の全体像を知る新たな手がかりになりました。

両遺跡の調査にあたり、格別なご理解をいただいた地権者をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成９年３月

長坂町教育委員会　教育長　**小松　清寿**

例　言

1　本書は山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条字西新井に所在する長坂上条遺跡の発掘調査概報である。

2　発掘調査は平成８年度の国庫補助金（国宝重要文化財等保存整備費）、ならびに県補助金（山梨県文化財保存事業費）の交付を受け、長坂町教育委員会が実施した。

3　本書の編集は小宮山隆（長坂町教育委員会文化財担当）が行なった。

4　出土品及び図面・写真は長坂町教育委員会が保管している。

5　石鏃の分析は村松佳幸氏（山梨県埋蔵文化財センター）に依頼し、土製品については新津健氏（山梨県埋蔵文化財センター）、福田正宏氏（筑波大学大学院）のご教示をいただいた。記して感謝します。

表紙写真　中央の工場周辺が長坂上条遺跡

もくじ

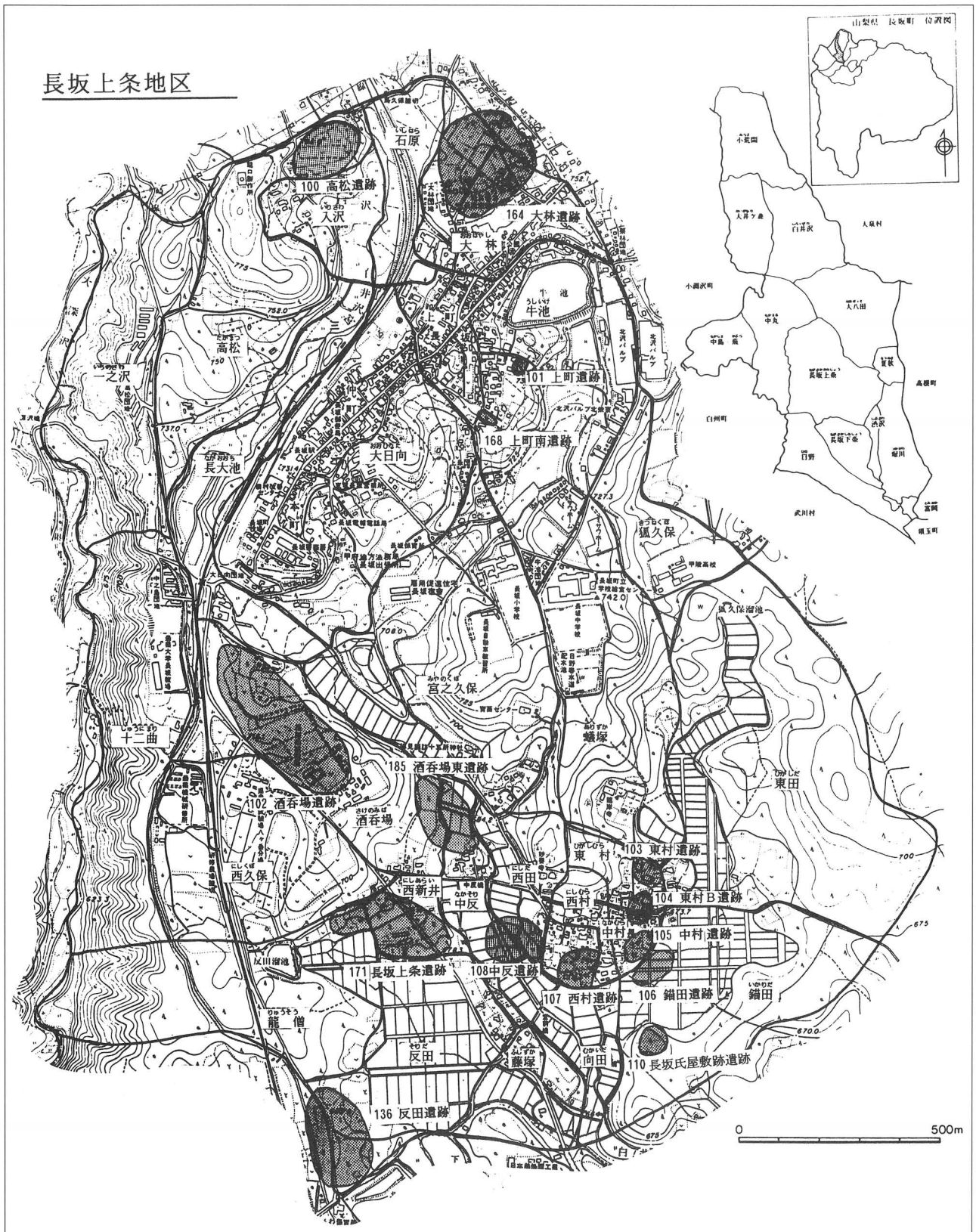
1　調査の経過……3
2　遺跡の環境……3
3　調査の概要……5

挿図

図１　周辺遺跡分布図……2
図２　調査位置（トーン）……3
図３　長坂上条遺跡調査区全体図……4
図４　遺構図……5
図５　出土土器……7
図６　土製品……8
図７　石鏃……8

図版

全景(1)……9
全景(2)……9
遺跡遠景……9
出土遺物(1)……10
出土遺物(2)……10
出土遺物(3)……11
出土遺物(4)……11



番号	遺跡名	種別	所在地	時代	備考
100	高松	散布地	長坂上条字高松3093他	縄（中、後）	758m
101	上町	散布地	長坂上条字牛池2087他	縄（中）	730m
102	酒呑場	遺構認	長坂上条字酒呑場621-1他	縄（早、前、中） 古墳、平安	H6～8 調査
103	東村A	散布地	長坂上条字東村1204他	縄（後）平	681m
104	東村B	散布地	長坂上条字東村1170他	古墳	673m
105	中村	散布地	長坂上条字中村1236他	古墳、平安	670m
106	錨田	散布地	長坂上条字錨田971他	平安	670m

107	西村	散布地	長坂上条字西村1249	古墳、平安	670m
108	中反	散布地	長坂上条字小反1294他	縄（中）	670m
110	長坂氏屋敷跡		長坂上条字錨田1032	古墳、平安、中世	670m
136	反田	散布地	長坂上条字反田370他	縄文、平安	686m
164	大林	散布地	長坂上条字大林2061他	縄（中、後、晩）	760m
168	上町南	散布地	長坂上条字大日向2304	縄（中）	740m
171	長坂上条	遺構認	長坂上条字西新井788他	縄（中、後、晩）、平	685m
185	酒呑場東	散布地	長坂上条字酒呑場710他	縄（中）弥、平	700m

図１　周辺遺跡分布図

1　調査の経過

1996年12月、長坂町長坂上条字西新井787－１地番にて宅地開発を行なう旨の「周知の埋蔵文化財包蔵地工事の届出」が町教育委員会を窓口として提出された。町教育委員会は現地踏査を行ない、届出地番のほぼ全面が遺物散布地であることを改めて確認した上、県教育委員会学術文化課ならびに開発サイドと協議を行ない、敷地全面の確認調査と、包含層の確実な破壊が予想される家屋基礎の掘削部分約165㎡について発掘調査を実施することを取り決めた。調査は1997年１月20日に開始し、途中降雪や厳寒による中断期間をはさみ、同年３月４日まで行なわれた。

2　遺跡の環境

長坂上条遺跡は、第四期更新世中期の八ヶ岳山体崩壊にともなう韮崎岩屑流によって形成された長坂台地の南面する緩斜面に立地し（標高680m前後）、その広がりは宮川とその支流の沖積面（現水田）にまでおよぶ。遺跡北側の台地上平坦面には縄文時代前・中期の八ヶ岳南麓を代表する大規模遺跡である酒呑場遺跡が、長坂上条遺跡を見おろすように立地している。周辺には縄文時代以降の遺跡が高密度に分布している。

長坂上条遺跡は山梨県内で最初の本格的な学術発掘調査が行なわれた遺跡として知られている。1940（昭和15）年８月下旬、当地域の原始古代研究に取り組んでいた井出佐重による現地踏査を契機にして、史前学研究

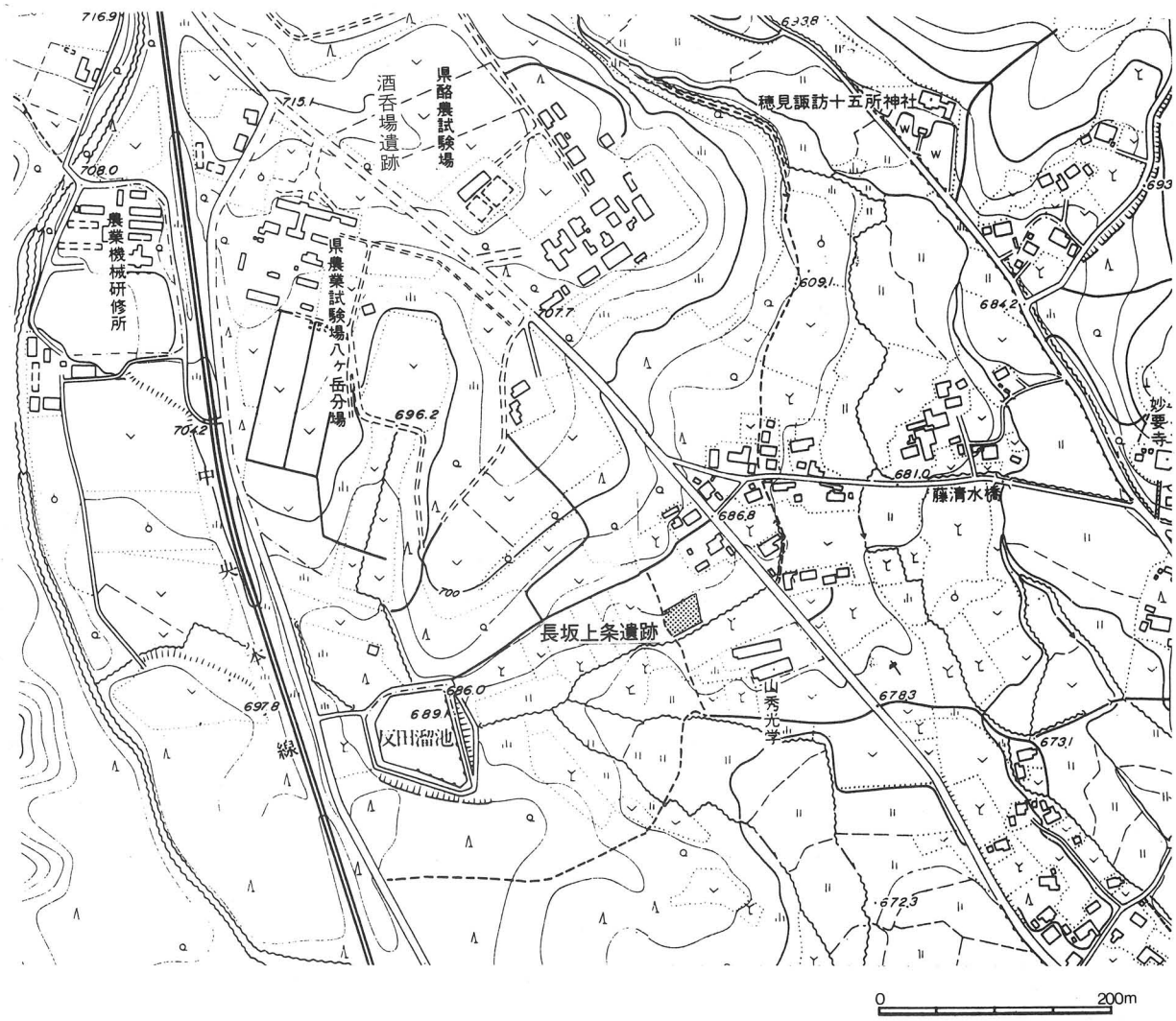


図２　調査位置

所の協力を得ながら同年10月から11月にかけての５回にわたり約60㎡の発掘を行なった。10月19日と20日の両日は史前学研究所を主宰する大山柏も調査に参加した。その調査報告＊１によると10基前後の配石遺構（配石墓か？）が確認されるとともに、16点の土製耳飾をはじめとする土製品、縄文時代後期後半から晩期全般、弥生時代中期にかけての土器片、石器等が出土した。残念ながらこれら出土遺物は戦災で所在不明になってしまったが、中部高地で数少ない縄文時代後晩期の好資料として戦後しばらくの間、標識的な遺跡として数多くの研究論文に活用された。

しかし、学史的な位置づけとは裏腹に、当地周辺の長坂上条遺跡に対する関心は急速に薄れ、1980年代には圃場整備事業により遺跡のほぼ半分に相当する範囲が破壊されてしまった可能性が高い。これはほぼ同時期に、長坂上条遺跡と同じく縄文時代後晩期の金生遺跡（大泉村）が発掘調査され、その後に国史跡として保存整備されたのとは対照的である。

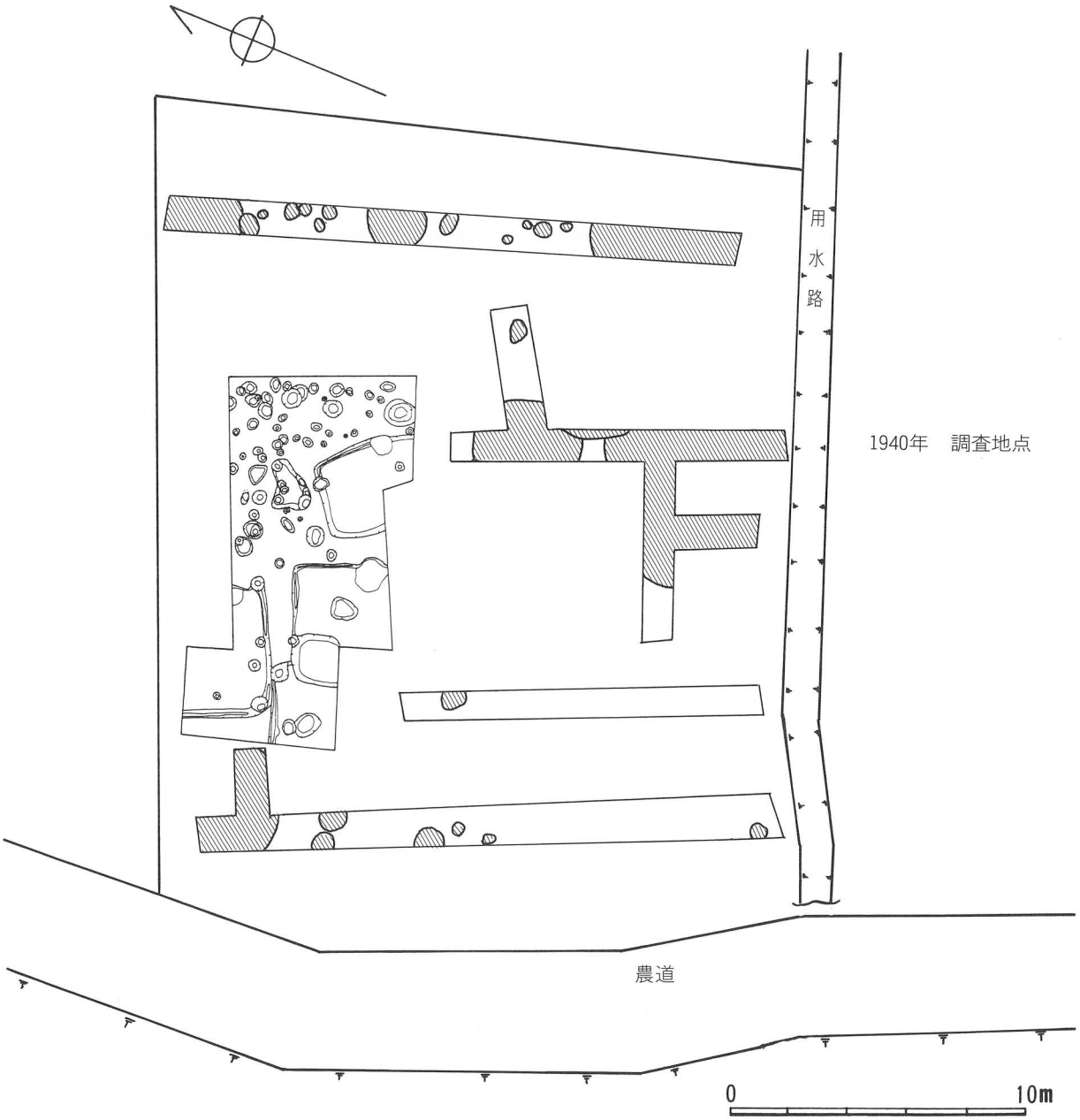


図３　長坂上条遺跡調査区全体図

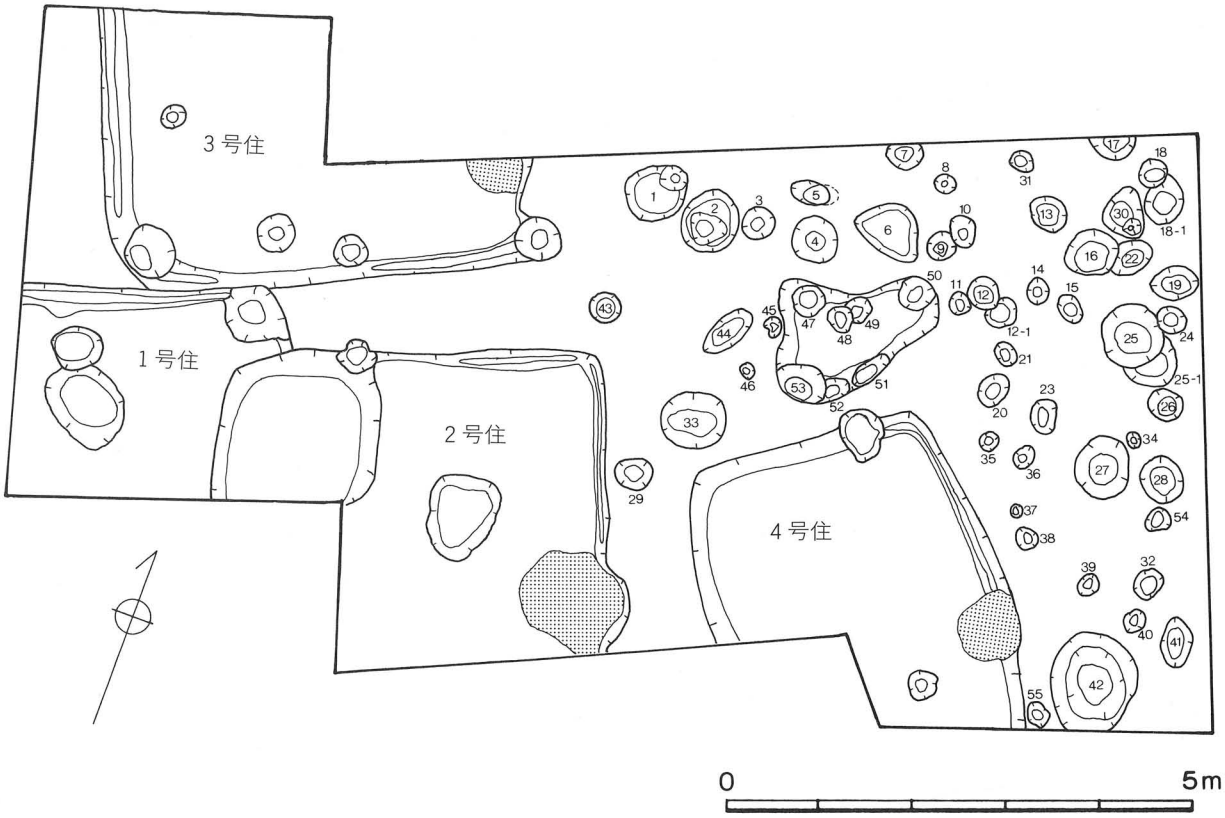


図4　遺構図（数字は土坑番号）

3　調査の概要

今回の調査区は1940年の調査地点から用水路を挟んだ北隣の畑地である。南西側に緩やかに傾斜する微高地縁辺に位置し、現在水田となっている沖積面とは2mほどの比高がある。この水田面も遺跡の範囲に含まれていた可能性が高く、区画された水田の土手には多数の土器片が現在も見受けられる。調査は家屋基礎部分を発掘し、敷地部分については遺構面の深度を確認するためのトレンチを任意に設定し、遺構確認面までを掘削した（図3）。現地表面から遺構面までの深度は、調査区北側で0.2～0.3m、南側で0.4～0.5mを測る。

図3に示したとおり、調査区全面で竪穴状の遺構が確認された。確認面付近での出土遺物は縄文時代後期と晩期、および平安時代であり特定はできない。調査区北西側に土坑群の存在が予想される。図4は家屋基礎部分の調査概要を示したものである。平安時代の住居址4軒と58基の土坑が確認された。土坑のうち比較的大型のものは柱穴列になる可能性がある。土坑内からの出土遺物は縄文時代後晩期の土器片が多いが、確実な時期決定はできない。このうち5号土坑内からは、後期土器片4点とともに、良質チャート製の石鏃1点、緑色凝灰岩製の磨石1点、黒曜石チップ4点、磨製石斧破損品1点と比較的遺物がまとまって出土した。

出土遺物は大半が未整理状態だが、縄文時代後期後半から晩期後半の無文土器片が圧倒的に多い。堀之内式や佐野式、清水天王山式も若干見受けられるが、加曽利B式後半から後期終末、および晩期後半の浮線網状文土器がとくに数多いようである。

＊1　大山柏・竹下次作・井出佐重1941「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』13－3　1－29頁　史前学会

図５に出土土器の一部を掲載した。

１～６は後期後半の土器群である。１は加曽利Ｂ式の注口土器肩部と思われる。２～５は肩部から胴部に羽状沈線を施し、口縁直下が屈曲する土器群で、後期後葉に位置づけられる。６は安行２式紐線文系土器の口縁部であろう。７は沈線による対弧文を施す壷形土器で表面に朱が塗られている。後期終末から晩期初頭に位置づけられよう。８～16は晩期前半の土器群である。８・９は清水天王山式土器である。８は平縁で直下に入組文が施された清水天王山式の古段階の土器であろう。10は佐野Ｉ式に類するものであろう。11は大洞ＢＣ～Ｃ１式に並行するものと思われる。12～14は晩期安行式系統の土器であろう。12は安行３ｂ式、13は安行３ｃ式、14は安行３ｄ式にそれぞれ並行すると思われる。15と16は縄文地文に横位の沈線を施した土器である。17～39は浮線網状文土器群で、比較的古段階のものが多いようである。17～22は鉢形土器、23と24は口縁直下に１条の隆帯が施された深鉢形土器、25は網目状撚糸文が施された深鉢形土器、26～32は口縁直下に１～３状の凹線を施した深鉢形土器、33～35は無文の深鉢形あるいは甕形土器、36～39は条痕文が施された深鉢形あるいは甕形土器である。40は口唇部に上面が窪む小突起がつけられた無文土器で晩期と思われる。

図６に土製品を抽出した。１～４は土製耳飾で、１は内面に朱が施されている。５は四足土器の脚部と思われるが判然としない。６は土偶頭部である。眼鏡状の長方形枠内に一条の横長沈線を施したもので、遮光器土偶の影響を受けたものと推測される。

図７に石鏃を抽出した。これらの所属時期はいずれも後～晩期であると思われる。１～15は茎部をもつ有茎鏃である。１～13が側縁部に段をもち、飛行機鏃と呼ばれているものである。その段にも形態差があり、１～４・９・10・13は段がはっきりしているが、５～８・11・12はわずかに段が認められるものである。14・15は側縁部に段はもたず、わずかに外湾している。基部形態は１～９・14・15が凹基、10～12は平基、13が凸基である。凹基は８・９は抉りが深いが、その他は全て抉りが浅い。茎部は欠損している割合が高く、その長さが不明なものが多いが、６・13のようにわずかに張り出した短い茎部をもつものもある。16～20は茎部をもたない無茎鏃である。16～18は凸基、19・20は平基である。１・８・16～19が完形で、その他は欠損品でとくに茎部と脚部の欠損率が高い。石材は８が石英安山岩で、その他は黒曜石製である。

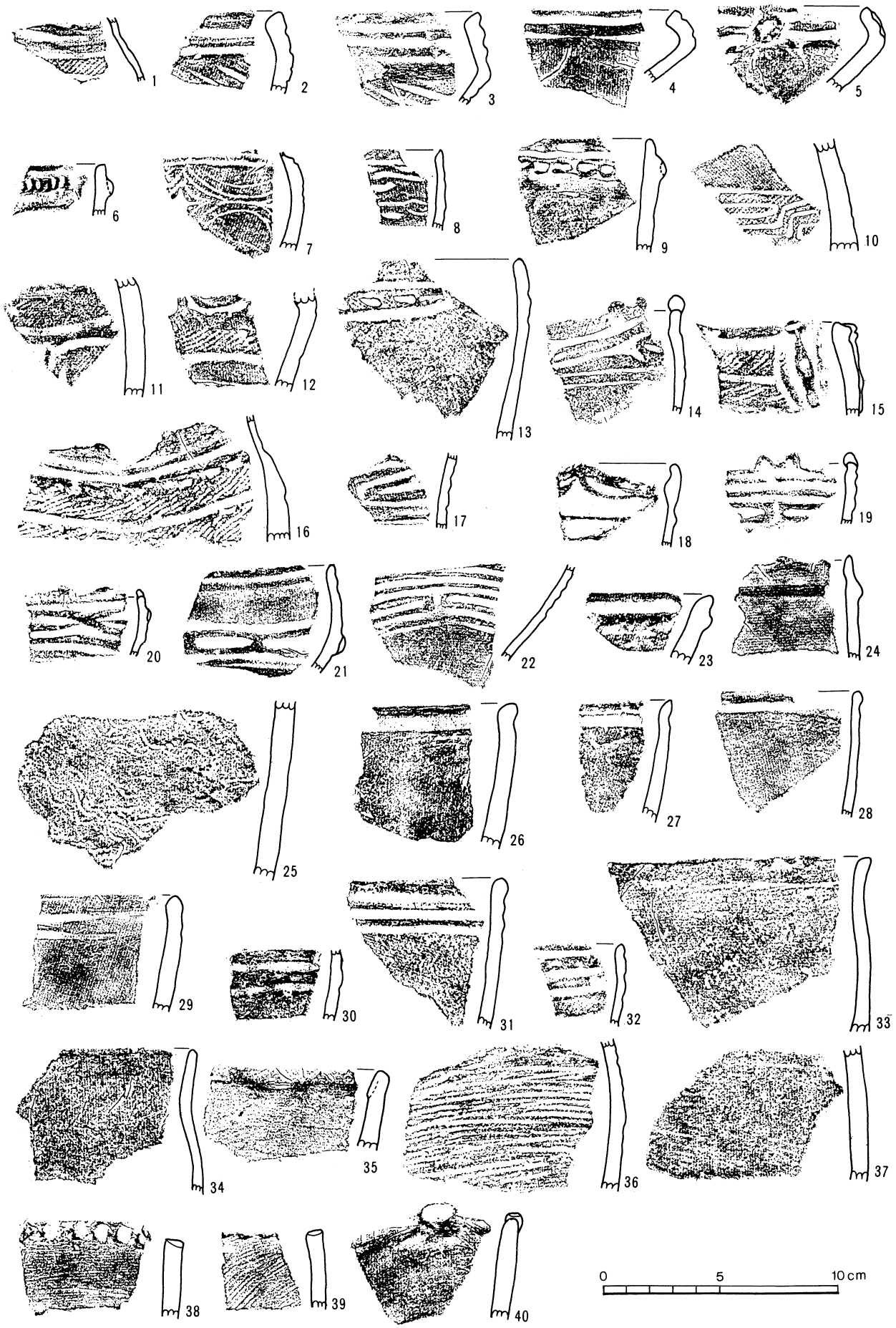

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
5
10cm

図5　出土土器

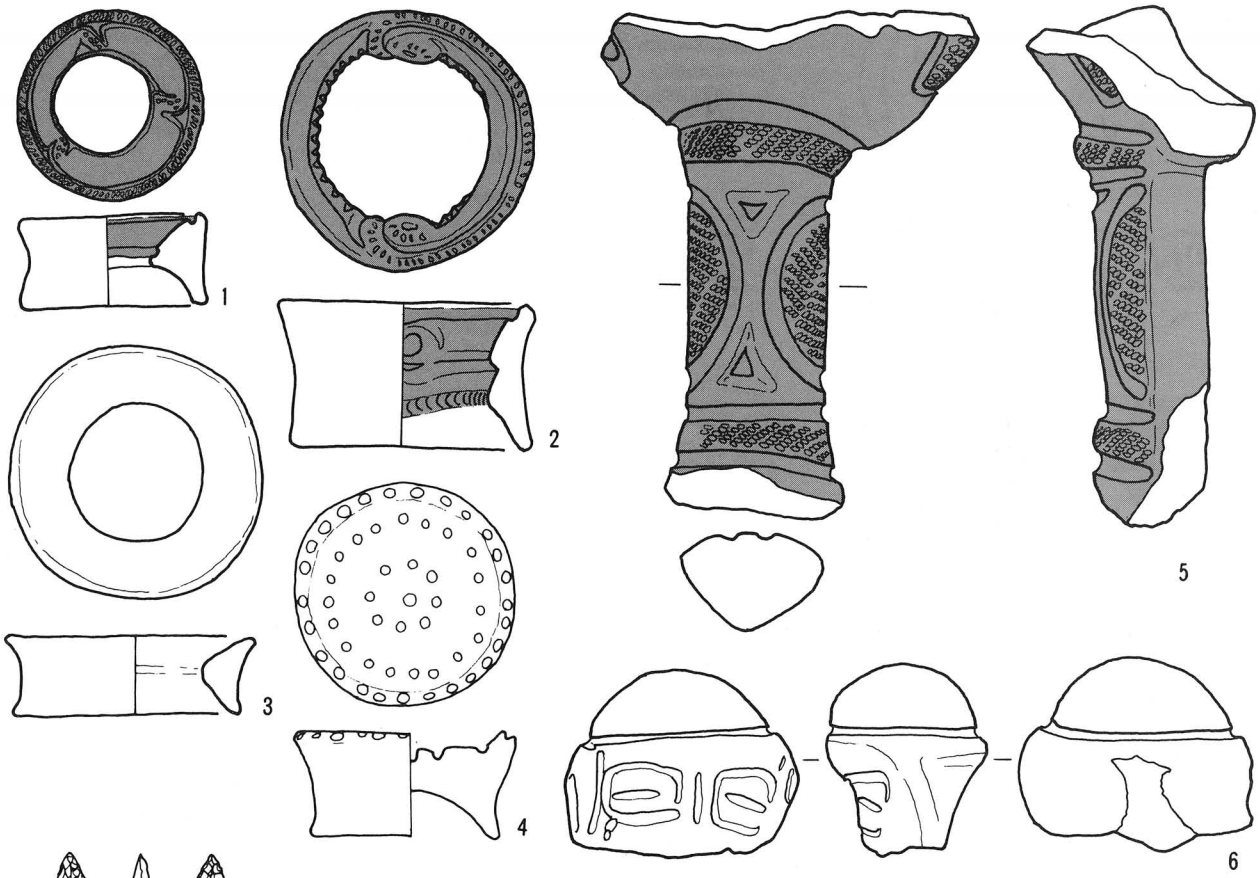


図6　土製品

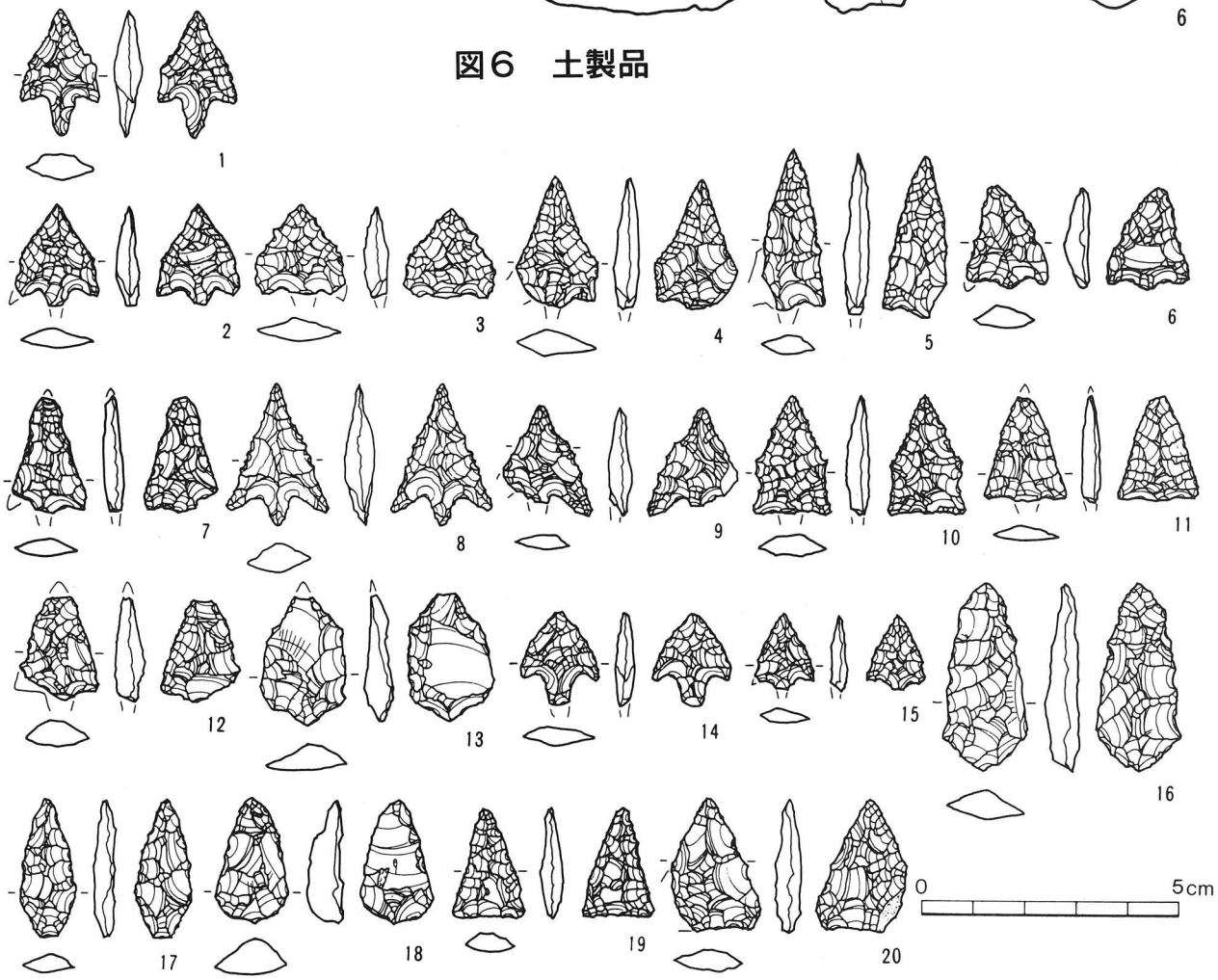
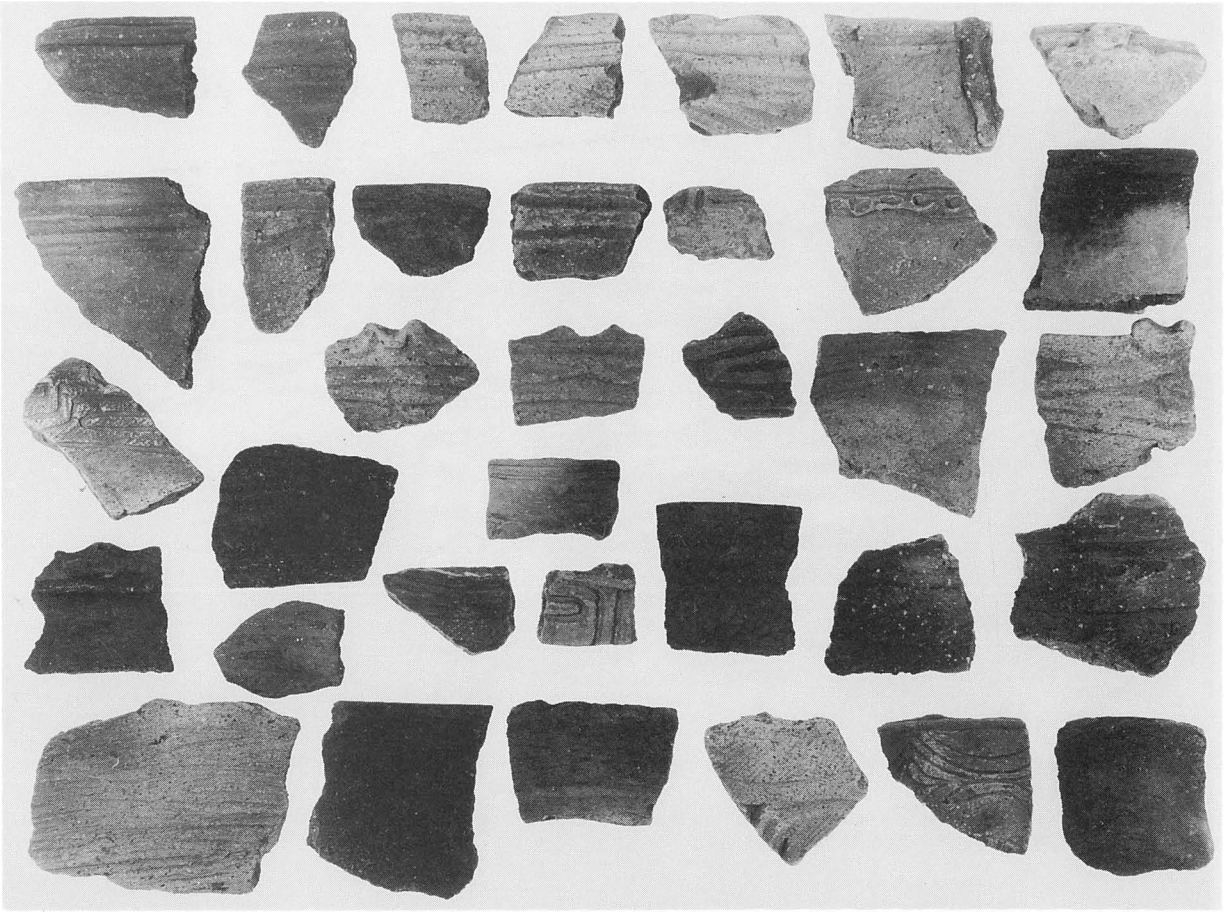


図7　石　鏃

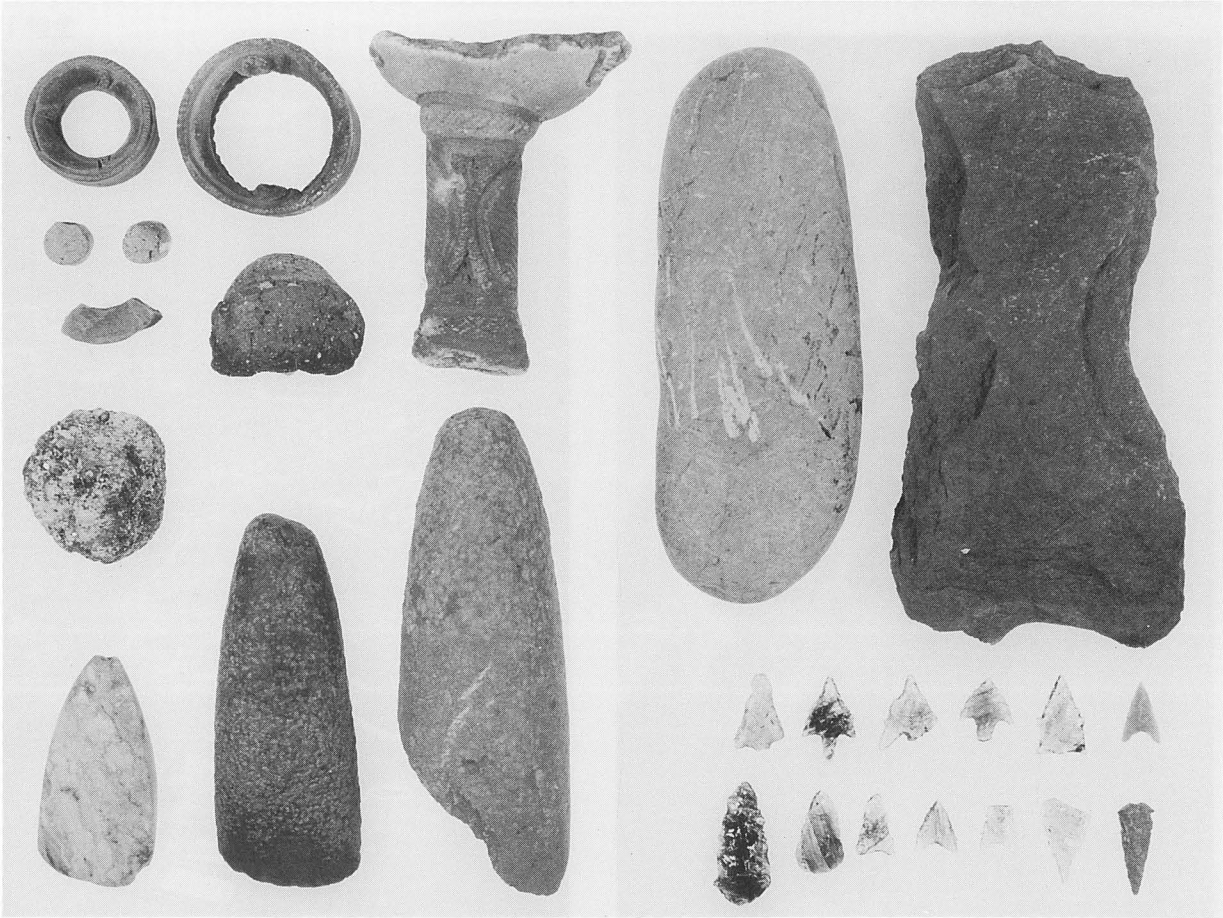
全景(1)

全景(2)

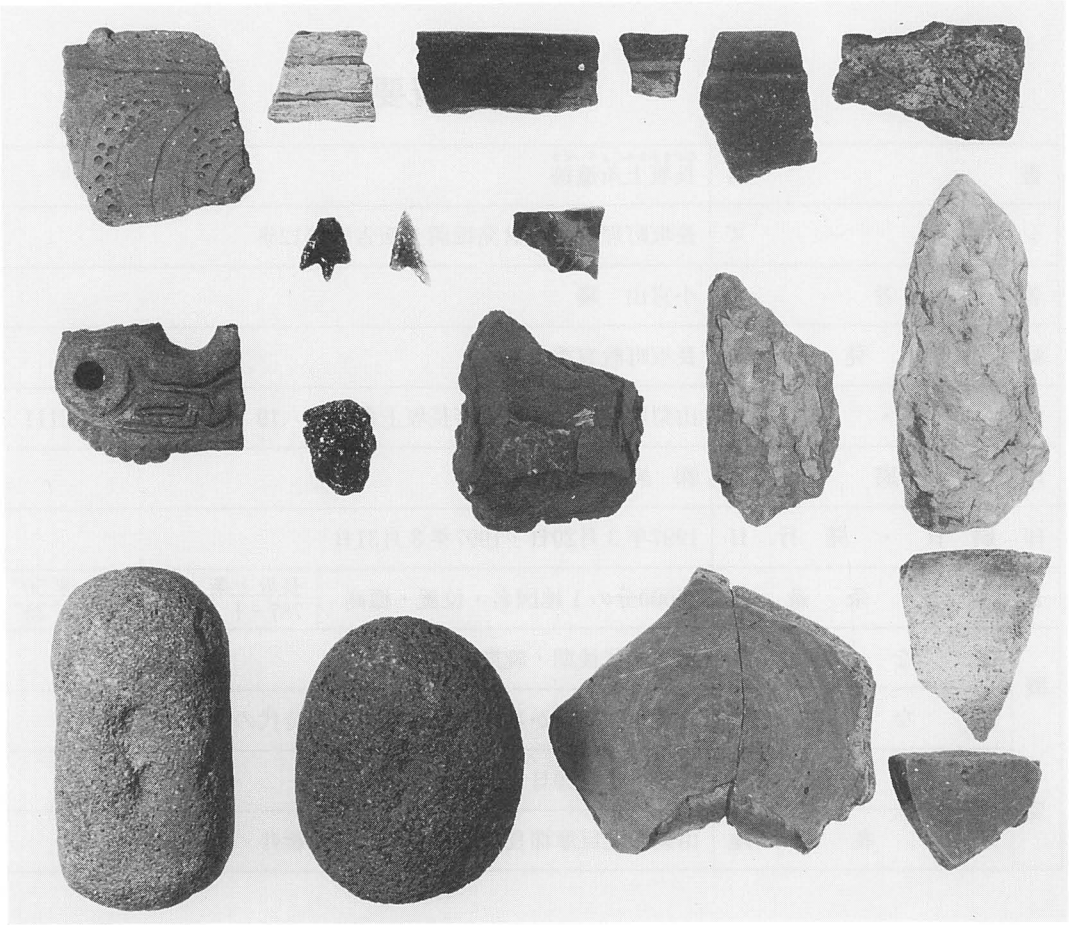
遺跡遠景（→は発掘地点）



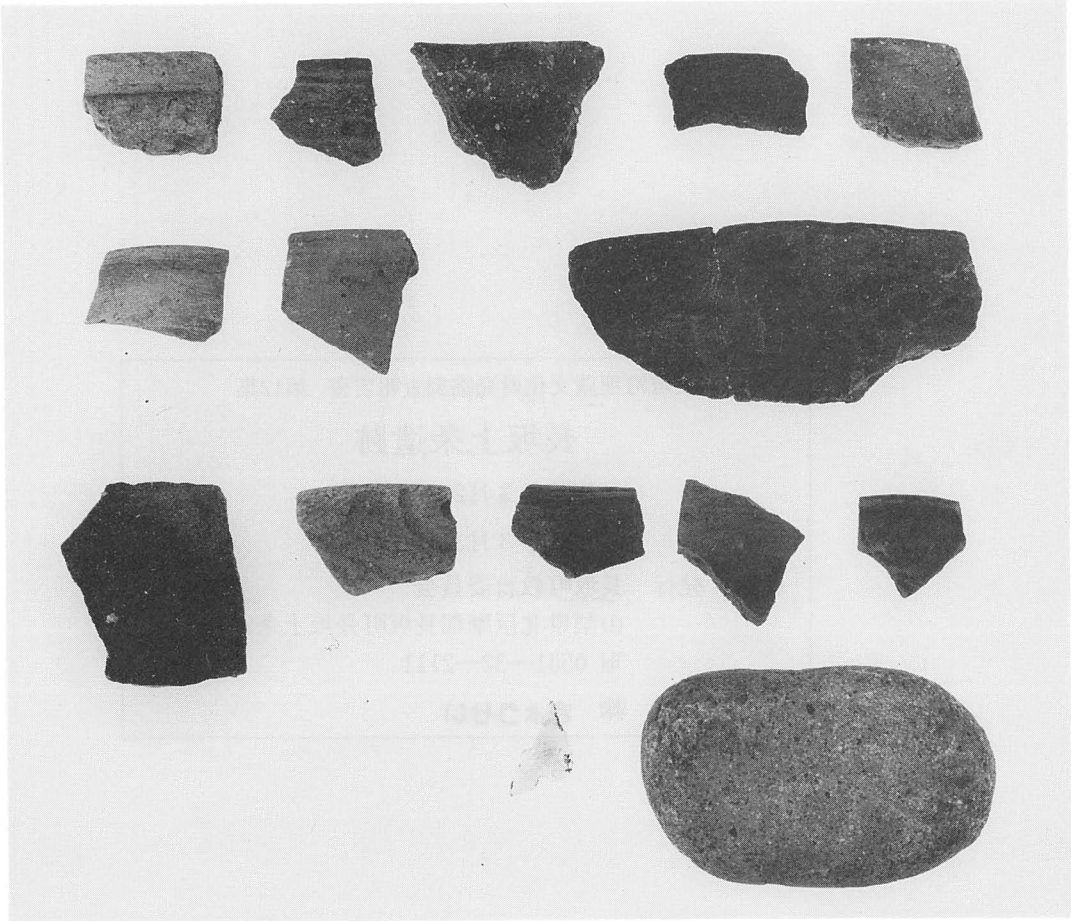
出土遺物(1)（調査区）



出土遺物(2)（調査区）



出土遺物(3)（平安時代住居内）



出土遺物(4)（平安時代住居内）

報告書概要

書名		長坂上条遺跡（ながさかかみじょういせき）			
シリーズ		長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集			
著者名		小宮山　隆			
編集・発行者		長坂町教育委員会			
住所・電話		山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575－19　Tel 0551－32－2111			
印刷所		㈱　ぎょうせい			
印刷日・発行日		1997年３月20日・1997年３月31日			
長坂上条遺跡		25000分の１地図名・位置・標高	長坂上条787－1	北緯 35°48′50″ 東経138°22′25″	680m
概要	主な時代	縄文時代後期・晩期・平安時代			
	主な遺構	縄文時代後期から晩期の土坑　平安時代の住居址			
	調査期間	1997年１月20日～1997年３月４日			
	所在地	山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条字西新井			

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書　第12集

長坂上条遺跡

1997年３月20日　印刷

1997年３月31日　発行

編集・発行　長坂町教育委員会
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575—19
Tel 0551—32—2111

印　　刷　㈱　ぎょうせい